



# 毎日もらえる追放特典で ゆるゆる辺境ライフ! 3

α L P H α L I G H T

**水都蓮**  
*Minato Ren*



アルファライト文庫





### シェリー

エルバース  
孤児院の子ども。  
責任感が強く、  
勉強熱心。

### ルドラ

エルバース孤児院の  
子ども。活発で  
元気溢れる10歳。

### リリス

エルバース孤児院の  
子ども。ルドラと  
仲がいい。

### シャロン

エルバース孤児院の  
子ども。シェリーの  
実の妹。

### エスティアーナ

通称エスト。二千年前から  
封印されていたが、ブライと  
運命的な出会いを果たした。

### ペレアス

怪しい実験を  
繰り返す禁術士。  
ブライの秘密を  
握っているらしい。

### ブライ

ギルドを追われたお人好し冒険者。  
謎のスキル【ログインボーナス】で  
人生が一変する。

### シエル

【ログインボーナス】の意思が  
人の形をとった存在。青い瞳から  
「シエル」と名付けられた。

## Main Characters 登場人物紹介

## 第一章

俺の名は、ブライ・ユースティア。【月夜の猫】という冒険者ギルドに所属していたのだが、ある日、俺は突然そこから追放されてしまった。恋人にも見捨てられ、途方に暮れていた俺に、【ログインボーナス】というユニークスキルが発現する。その力は毎日一つの特典が与えられるというもので、魔力を宿した剣から、肩こりを改善させる魔導具まで、色々な特典を受け取ることができた。

俺に与えられた特典の中には、王国北端のエイレーン村にある城の権利証も含まれていた。

その村は、土地は痩せており、魔族による襲撃が頻繁に起こるといって、まさに辺境と呼ぶにふさわしい土地だった。しかし、そんな状況にもかかわらず、村の人々が行き場をなくしていた俺を温かく迎えてくれた。この村に恩返しをしたい——そう思った俺はエイレーン村に腰を落ち着け、【ログインボーナス】の力を使い、村の復興に取り組み始めたのである。

先日俺は、村の復興を進めるべく、仲間達と共にスパリゾートの建設に着手した。

エイレーンの南にあるノーザンライトという街には、かつてとても栄えた温泉街があったが、富裕層を相手にした前時代的な経営を続ける内に客足が遠のき、寂れてしまっていた。

しかし俺は、その温泉が持つポテンシャルに目を付け、エイレーン村の近くに巨大温浴施設を建てることで、観光客を呼び戻そうと考えたのだった。

私腹を肥やそうとする老舗ホテルのオーナーなどから、様々な妨害を受けながらも、無事にスパリゾートは完成し、辺境の村の一大観光名所となった。

そうした過程で、ノーザンライトの老舗ホテル、「アルカディアホテル」の令嬢ユキさんや、【ロクインボナス】の意思が実体化した存在とも言うべきシエルなど、新たな仲間も増え、エイレーン村での生活はますます賑やかになっていった。

\*

その日、俺は城の前で、腕を組みながら一人佇んでいた。

そろそろ、頼んでいたアレが届くはずなのだが……

「おい、ブライくん。例の物が届いたぞ。山盛りだよ!!」

そう思うやいなや、喜びを全身に表しながら、エイレーン村の村長であるセインさんが

駆け寄ってきた。

「そうか、ついに来たのか」

セインさんが引き連れている馬車に積まれた荷物を見て、俺は喉を鳴らした。

どうやら随分と丁寧に運んでくれたようだ。高い金を掛けて輸送を頼んで良かった。

「それで、ブライくん。この前言っていた秘密兵器とやらは？」

「ああ。誰の目にも触れない場所に、厳重に保管してある。当然、量産済みだ」

「それは良かった。しかし、この村でこんな日を迎えることができるなんて」

さつきも言ったように、俺達はノーザンライトの北西に大規模なスパリゾートを築き上げた。

レジャーと療養を目的とした温浴施設は、その珍しさから多くの観光客を集め、村は空前絶後の好景気に沸き、完全に以前の活気を取り戻したのだ。

そこで、俺達は村の復興を祝うために、秘密裏にある計画を進めていたのである。

「ちょっと、ブライイ!! なに企んでるの」

俺とセインさんが荷物の搬入を進めていると、どこからか俺の仲間であるエステイアーナ——エストがジトツとした表情を浮かべながらやってきた。

「最近、セインさんと二人でこそそしると思っただけ、なにしてるの?」

「エスト……とうとう見てしまったか」

俺は深刻(しんくつ)そうな口調(くこう)でエストへ語りかける。

「いけない子だね。我々の秘密を知ってしまうとは」

そんな俺のノリにセインさんも続く。

「え、なに？ なんなの？ 二人ともどうかしちゃったの？」

俺とセインさんのただならぬ雰囲気(ふんいき)に、エストが困惑(こんわく)の表情を見せる。

しかし、これはあくまでも秘密の企画。目撃者を放っておくわけにはいかない。

「仕方ない。エストには特別に先行公開しよう。ただし、このことは他言無用(たごんむよう)だ。いいな？」

「う、うん……」

俺達は周囲に人がいないことを確認すると、荷車に積まれている物をエストに披露(ひろう)した。

「こ、ここ、これはまさか!!」

それを見たエストが恍惚(こうくわう)とした表情を浮かべた。

無理もない。こんな物を見せられれば、誰だってこうなる。

「お、お肉だああああ!!」

中に積まれていたのは、牧畜(ぼくちく)が盛(も)んなフェルディア地方産の食肉だ。牛、豚、鶏、いずれも最高級の物を取り揃(そろ)えられている。

「シッ、誰かに聞こえるぞ」

俺は咄嗟(とつさ)に背後(うしろ)からエストの口を手で塞(ふさ)いだ。

これは俺達からのサプライズ。村の人達にはギリギリまで伏(ふ)せておきたいのだ。

「う、うん。ごめん。でも、これはちょっと……」

「え？」

「う、腕(うで)が……」

「す、すまん……」

咄嗟(とつさ)のこととはいえ、背後(うしろ)から腕(うで)を回してというのは少し乱暴(らんぼう)だったか。反省(はんせい)せねば。

「で、でも、どうしたのブライ。こんなにたくさんのお肉」

「ああ。エスト、先月のスパリゾートの売り上げ、聞いたか？」

「ううん。全然、知らないけど」

「そうかそれなら教えてやろう。なんと……」

俺はエストの耳元(みみもと)でこっそりと額(がく)を告(つ)げる。

「えっ、そんなに!？」

「ああ、エストのアイディアのおかげで、この村は莫大(ばくだい)な利益(りやく)を上げたんだ」

「ほえ。す、凄(すこ)いね」

「というわけで、みんなでお祝いしようと思(おも)ってな。折角(せつかく)だしエストも協力(きょうり)してくれ」

「うん。任(まか)せて」

こうして、エイレーン村でバーベキュー大会が開かれることとなった。

\*

数日後、村人と先日のいくつかの事件で世話になった人達を招いて、村の広場でバーベキューを開催した。

「ブライくんが来てくれたおかげで、この村も以前のように、いやそれ以上に発展する形で復興を遂げた。それだけでもありがたいのに、こうしてバーベキューまで開いてくれた。改めて、ブライくんに感謝を。そして、今日は心ゆくまで楽しもう。乾杯!!」

セインさんが音頭を取ると、乾杯の声が響いた。

「ぶはー!!」

「うまい!」

みんなが手にしたドリンクを飲み、欲びを口にする。

そして、テーブルに置かれた鉄網の上に一齐に肉が置かれてジュツツという音を立てた。肉の焼ける音と共に、みんながそれぞれに話を始め、辺りが賑やかになっていく。

俺のテーブルに座るのは、エスト、村の工房で魔導具の研究をしているレオナ、ハーフエルフのラピス、そしてシエルといういつものメンバーだ。

「ねえ、ブライ。これはなに?」

シエルが首を傾けながら、テーブルの上の、小皿に注がれた、赤みがかった黒い液体を指差した。

シエルは、俺のスキル【ログインボナナス】の意思のようなものが、膨大な魔力によって人の形をとった存在である。見た目の幼さ同様、精神年齢も幼いのか、こうして色々なものに興味を示すことがある。

「フツ、知りたいか? シエル、それこそが今回の秘密兵器だ」

「おー、秘密兵器」

「察するに、肉をこれに付けるのでしょうか?」

「見たことない液体だけど、これは一体……」  
ラピスとレオナも未知の液体に興味津々だ。

「うむ。これは焼き肉のタレというやつらしい」

「そのまんまなネーミングだね」

俺の返答に、少し呆れたように返すエスト。

「仕方ないだろう。鑑定したらそうやって表示されたんだ」

「ということは、もしかして、【ログインボナナス】で生み出した物かしら?」

レオナの指摘に俺は頷く。



俺が感想を言う前に、セインさんの絶叫が響いた。  
「とりあえず好評みたいだな」

パーティから追放され、行き場をなくした俺にとって、この村は故郷のようなものだった。いつか恩返しがしたいと思っていたのだが、こうして少しでも楽しんでもらえたのなら良かった。

「そうね。でも、お肉足りるかしら?」

レオナがそう言って視線をよそのテーブルに移す。

俺は、レオナの視線の先に目を向けた。

するとそこにいたのは、優雅な所作で大量の肉を平らげる銀髪の女性騎士であった。

「クレアさんだったけ? とても綺麗な人だけど、凄まじい大食いだね」

「貴族の出身だけあって食べ方は上品なだけだね」

女性騎士——クレアさんは、北の城塞で暗黒大陸からこちらの大陸に攻め込む魔族を相手に、防衛を務めている人だ。今はたまたま魔族の侵攻が収まっていることから、この会に招待したのだが、確かに随分な大食いだった。

「ブライクーン」

俺達の視線に気付いたのか、クレアさんがこちらに手を振ってきた。

「折角だし、挨拶ぐらいはしておこうかな」

俺は彼女のテーブルにお邪魔することとした。

「なんというか、珍しい組み合わせだな」

クレアさんと同席していたのは、レモンさんにユキ、そしてアリアさんであった。

レモンさんは自称植物学者だが、その正体はノーザンライト騎士団の前団長の腹心であった男。

ユキはノーザンライト一の宿泊所、アルカディアホテルの元オーナーの孫娘で、スバリゾート建設のために協力し合った仲だ。

そして、アリアさん。昔から俺に良くしてくれる教会のシスターで、元仲間には暴力を受け、ギルドを追われた俺を治療してくれて、休暇を勧めてくれた人だ。おかげで俺はこのエイレーン村という、新たな故郷に巡り合うことができた。彼女には感謝してもきれない。

しかし、皆それぞれ俺とは交流のある人達だが、彼女達同士の繋がりはあまりないので、随分と新鮮な気分だ。

「そうかもね。実際、私達に交流はほとんどないもの。でも、共通の話題があったから、それでつい盛り上がったの」

「共通の話題……?」

「ここに集まっているのは、みんな剣の使い手なんですよ。私は嗜み程度ですけど」  
ユキはそう言って俺に笑いかける。

そういえば、前にノーザンライトを騒がせた辻斬りを華麗な刀捌きで斬り伏せたのはユキさんだった。俺は斬ったその場を見たわけではないが、刀を持って佇む彼女の姿は確かにサマになっていた。

「それは謙遜でござるよ。あの妖しげな力で強化されたジーンめを倒したのだから、達人級の腕前なのは間違いないでござる」

レモンさんがうんうんと頷いてみせる。

ちなみにレモンさんの素の喋り方はこんな感じではないのだが、前団長殺害の罪を着せられたことから、追っ手から逃れるためにこの尖ったキャラ作りをしているとのことだ。今もまだその容疑は晴れていないため、そのキャラは続行中のようだ。

「あれは皆さんが消耗させてくれたおかげですから……」

「いやいや、ユキさんの立ち居振る舞いを見たら分かるよ。相当な鍛錬を積み重ねた人の動きだもの」

「そうですね。刀という物は、私の使うような長剣よりも遥かに扱いが難しいと聞きますし、よほど鍛錬されたんでしょね」

クレアさんとアリシアさんがユキを褒め称える。

立場は違えど二人とも凄腕の騎士だ。そんな二人が認めるほどに、ユキは腕が立つのだろう。

「うーん……アリシア殿は光魔法と長剣の扱いに長けた聖教騎士。ユキさんはこの国では非常に希少な刀使い。レモン殿は神速のごとき剣捌きだと言うし、ブライくんなんて魔人を倒したほどの実力者だ。ここにいる人達で剣術大会なんて開いたら面白そうだね」

そう言ってクレアさんが上機嫌で笑った。どうやら、少しでも酔っているようだ。

「い、いやあ、自分はさすがに恐れ多いというか……あくまでも我流の剣なので」

そう言って俺は謙遜しておく。

基本的に俺が相手にしてきたのは魔獣ばかりだ。人と競う剣にはあまり自信がない。

「今日はずっとこんな感じで剣の話？」

俺は話題を変えようと隣に座るアリシアさんに尋ねる。

「いえ、そんなことはないですよ。他の話も……」

「どんな？」

「そ、それは……」

アリシアさんが気まずそうに言葉を詰まらせた。答えづらい質問をしてしまったのだろうか？

「ふふ、それはズバリ恋愛トークだよ、ブライくん」

「れ、恋愛トーク？」

口ごもるアリシアさんを見たクレアさんから、意外な答えが告げられる。それはまた随分と剣の話とはかけ離れた話題だ。

しかし、恋愛か。俺はつい、周りを見回してしまう。

クレアさんはしっかりとした人で、人目を惹くほどに美しい容姿をしているが、強者との戦闘を熱望してやまない武人でもある。戦闘狂といってもいいかもしれない。レモンさんも正体はともかく、今はござる口調のかんりの変人である。

そんな二人の恋愛というのはまるで想像できない。

「む……なんだか、想像できないって顔してるね？ お姉さん、ちよつと傷付いちゃうな」

「いざるいざる」

どうやら思考が顔に出ていたようだ……

二人が抗議の視線を送ってくる。

「私だって単なる戦闘狂ってだけじゃないの。ちゃんと理想のタイプがあるのよ」

「そうなんですか？ ちなみに、どのような……」

あまり根掘り葉掘り聞くのとはばかられるが、クレアさんの理想のタイプというのは純粋に興味がある。

「私より強い人」

「ああ……」

あまりにもらしい〃 答えで納得してしまった。

「私よりも強い人なら、きつと毎日が楽しいと思うの。朝から晩まで心ゆくまで斬り結んで。いつしか、時間も忘れて二人は強さの高みへと昇る。そして、疲れた身体で穩やかに団らんする。美味しい料理とあの浮遊島みたいな温泉があれば、こんなに幸せなことはないわ!!」

うーん。やつぱり戦闘狂。後半はささやかな家族の幸せの形という感じだが、前半の願望を満たしてくれる男はなかなかいなさそうだ。

「ちなみにそういった意味で私の一番の好みはブライくんかなー」

——ガチャンツ!!

クレアさんがいたずらっぽく笑みを浮かべて言うのと、ちょうど同じタイミングでアリシアさんがジュースの入ったグラスを倒してしまった。グラスからジュースが零れ、アリシアさんの服にシミを作っていく。

「だ、大丈夫か、アリシアさん？」

俺はポケットからハンカチを取り出すと、服に付いたシミを拭き取ろうとする。

「あ、あわ、あわわわわわわわわわわわわわわ」

すっかりしている彼女にしては珍しい事故で、いつになく動揺どうようしているようだ。

「ブブブ、ブライさん、その……手がふ、触れ……!?」

「あ、す、すまない……」

慌わててアリスさんの肩から手を離す。咄嗟とつさのこととはいえ、いきなり触れるのはまずかったか。

「その、濡ぬれたままだと風邪かぜを引くかと思って。無神経だった」

「いいい、いえいえ、その……む、むしろ、あ、ありがとうございます」

アリスさんが顔を真ま赤かにして俯うつむいてみせた。さすがに子ども扱いしすぎただろうか。

「んん……紳士しんし的てきですなあ、ブライ殿」

レモンさんがニヤニヤと笑いながらこちらを見てきた。なんだか含みがありそうな笑みだ。

「なんだその笑みは？」

「いやいや、ハンカチを持ち歩いて、女性に気遣きづかいを見せるなんてなかなか手慣れているな」と思っただけでござるよ」

「シエルが飯の時に汚こすことがあるから常備じょうびしているだけだ。それに……」

「それに、なんでござるか？」

いたずらっぽくレモンさんが尋ねてくる。

あれ……今、俺はなにを言おうとしたんだ？

服のシミを拭き取っている時、なんだか妙な感覚だった。まるでそうするのが当たり前というか、そうしてアリスさんの面倒を見るのが自然な流れのような気がして……

「なんでもない。とにかく他意はないからな」

よくよく考えればおかしい話だ。アリスさんは俺なんかよりもずっとしつかりした人だ。それをまるで子どもの世話をするように接するなんてやりすぎだ。きつと、どうかしていたのだろう。

「まあ、からかうのは程々にするでござる。それよりも、ユキ殿はどうでござるか？」

「ユキ殿は確か、幼馴染おともながいましたな？ 彼とはどうでござる？」

幼馴染おともなというのは、確か気弱そうな青年のアンディだ。ユキはともかく、彼の方はユキに想おもいを寄せていそうだった気がする。

「ふふ、ただのお友達ですよ」

ユキさんがさらりと言つてのけた。にべもないというか、脈はなさそうな雰囲気だ。

「うーん……ということは、他に心に決めた相手でも？」

「それこそ、まさかです。恋愛についてはよく分かりませんから。でも、結婚するなら父のように優やさしい人が良いですね」

ユキさんの父、ニコルさんは穏やかな人だ。彼女もそんな父を慕したっているようで、この

様子だと恋愛も先の話だろう。

「そんなレモンさんはどうなんだ？ 他人のことはかり聞いているが、俺としてはレモンさんのそういう話に興味がある」

「おっとブライ殿、もしや拙者に興味津々でござるか？ 照れるでござるな」

「いや、純粹に、普段おどけてるレモンさんの人となりを知る機会だと思つてな」

「むう……折角からかつたのに、あつさりとかわすでござるね」

彼のやり方はなんとなく分かつてきた。こうして道化を演じて色々なことを煙に卷いたり、相手をからかうのがお得意のようだ。

「といつても拙者に面白い話などないでござるよ。拙者は生まれも育ちもこのノーザンライトでござる。近所に孤児院があつて、いつも一緒に遊んでいた女の子がいたでござるが、その幼馴染が初恋相手でござる。騎士団への入団が決まった十二の時に、告白してあつさりフラれたでござるよ」

「おやおや、意外だなあ。レモン殿は、貴族のご婦人をたぶらかしてるイメージだったから」

「確かに」

クレアさんの言葉に俺は思わず同意してしまった。

以前、レモンさんの素顔を見たが、かなり整つていて年上ウケしそうな顔だった。それ

で、今言つたようなことをしていてもおかしくはなさそうな雰囲気身をまとっていると  
思つたのだ。

「お二人は拙者のことをなんだと思つてゐるでござるか……」

「まあ、うさんくさい偽装をしているんだから、どうしてもそういう目で見られるだろう」

「ぬう……なにも言い返せないでござる」

それにしても、意外だ。

その幼馴染とはうまくいかなかったようだが、騎士団という安定した地位と彼の容姿からすれば、彼との交際を断る理由はなさそうなのに。

「なんで、フラれたんだ？」

「直截に尋ねるでござるね！ まあ、昔のことだから別に構わんでござるが」

レモンさんは咳払いをしてから語りだした。

「彼女は、それはそれは聖女のように優しい人でござつたが、それ故、自分の住む孤児院を支える道を選んだでござる。王都に出稼ぎに行つて仕送りをしたいと。だから拙者の気持ちには応えられない、と言つていたでござる」

「孤児院のために出稼ぎを……随分と思ひやりのある人なんだろうな」

レモンさんの、昔を懐かしむその表情を見れば、その人がどれほど優しく、彼の思い出

が良いものだったかが窺い知れる。

「なんだか楽しそうですね……」

その時、陰気なオーラと共に、痩せ細った背の高い男が現れた。

「お、お前は……」

意外な登場人物に俺は驚いた。

そこにいたのは、かつての俺の仲間であるレヴェナントであった。

「お久しぶりです。あの魔人との戦い以来ですねえ」

ぼそぼそとレヴェナントが挨拶をしてくる。

俺を追放したパーティの仲間だが、意外と親切な性格で、以前村を襲った魔人の撃退に協力してくれた。

そのあと、いつの間にか消えていたので一度はノーザンライトに戻ったのだと思っていたのだが、こうして再び顔を合わせる事になるとは。

「それにしても水くさいですね……昔の仲間だというのに、私だけ呼ばれていないなんて……」

「いや……ギルドとはあまり交流がないからな」

「でも、ガルシアは呼ばれているじゃないですか？　今も村長の前で自慢の筋肉を披露しながら踊ってますよ」

レヴェナントが指差した先で、酒に酔って上機嫌なガルシアが踊っていた。

ガルシアというの俺の元仲間で、ギルドとはほとんど絶縁状態にある中で、ルーンの取引だったり、スパリゾートでの警備の依頼であったりと彼とはなにかと交流を持っていた。そのために今回の席にも招いたのだが、レヴェナントはそこに自分だけが名を連ねていないのが不服のようだ。

「まあ、呼ばなかったのは悪いと思ってる。こういう騒がしいイベントは苦手だと思ったんだ。それにそもそも、お前、肉が食べられないだろう？」

あまりパーティメンバーで食事をする機会はなかったが、レヴェナントが肉を食べられないことはよく覚えている。肉料理が美味しい店でも、頼むのはフライドポテトばかりで、取り憑かれたようにイモ類を食べていた。

「まあ、私は菜食主義者なので、肉なんて焼ける音を聞くのも苦痛です。でも、こういう会で自分だけハブられているなんて悲しいじゃないですか……私達の仲はそんなものだったのですか？　まさかガルシアよりも優先順位が低いなんて!!」

なんだか面倒な恋人みたいになってきた。

確かにレヴェナントには、魔人との戦いでかなり世話になったが、親しい友人かと言われると微妙な距離感だ。そもそもこいつはあの戦いのあと、なんの挨拶もなくふらっと姿を消していたし。

「察するに、ブライくんのお友達かな？ 私にはクレア、気軽にクレアちゃんと呼んでくれても良いよ？」

やはり酔っているのか、少し陽気なクレアさんがレヴェナントに話しかける。

「これはどうもご丁寧に。ギルド【月夜の猫】所属のレヴェナントです。よろしく願います、クレアちゃん」

思ったよりもノリが良いなレヴェナント。

そのあと、レモンさんやユキとも挨拶を交わし、レヴェナントは自然と俺の隣に座ってくる。

「ということ、興味ありませんか？」

「なにがだ？」

「私の恋愛トークです」

レヴェナントの恋愛トークだと……？

人生の全てを魔術研究に捧げてそうなマッドサイエンティストからは、到底想像できない単語が飛び出てきた。俺は予想外のことに、思わず表情を凍りつかせてしまった。

「なんです、その表情は？ 私のような人間には、恋愛など無縁だ」と？」

「まさか、そんなこと思ってるわけないだろう？」

「良いですか？ これでも私、妻子がいいますからね？ その点では、あなたの人生の先輩

です」

「なん……だと？」

恋愛どころか、レヴェナントが既婚者？

あまりにも意外というか想像を絶していた。

「興味ありますか？」

興味がないかと言え、滅茶苦茶興味がある。そんな俺の心中を察してか、レヴェナントは一呼吸置くとすぐに話し始めた。

「あれは私がとある国の宮廷魔術士として働いていた時でした」

一つ目から既に知らない情報だ。彼の過去について聞いたことはなかったが、まさか宮仕えだったとは。

「ある画期的な魔法技術の研究に従事していた私は、寝食も忘れて研究に没頭していました。そしてある日、私は疲労から王宮の回廊で意識を失ってしまいました。そんな私を抱してくれたのがレティシアでした」

「レティシア……それがレヴェナントの奥さんの名前か？」

「はい。それ以来、彼女は王の命で私の身の回りの世話をしてくれるようになりました。色々なことに気付き、私のような偏屈な人間にも朗らかに話しかけてくれる姿に、いつしか私は心惹かれました。それから、私は彼女に毎日、花と愛の言葉を贈り続けました。や

がて私の想いは実を結び、子どもにも恵まれました。どうですか？　これが私とレティシアの馴れ初めです」

「……………なるほど」

なんというか、良い意味でありふれていた。

一見、怪しげな風貌のレヴェナントだが、その過去は人間味に溢れていたようだ。

「わあ、素敵な話だねえ。レヴェナントさんにそんなエピソードがあったなんて」

いつの間にか、エスト達までもが集まっていた。

「そうですね。レヴェナントさんのようにストリートに好意を示される方が女性としては嬉しいかもしれませんね」

「そういうものなのかしら」

レオナはあんまりピンときてないようだが、エストとラピス的には、レヴェナントの行動は評価が高いようだ。

「ふふん。これが、人生の先輩の魅力というやつですよ、ブライ。少しは見直しましたか？」

「そうだな。今までよく知らなかったレヴェナントのことが少し分かってきた気がする」  
こうして俺達は、様々に交流を深めながら、バーベキューを楽しんでいく。

そして、日が暮れ始めた頃……

「フハハハ、随分と美味しそうな肉達じゃないか。それに、見知った面々も揃っているな。まったく、昼から参加できなかったことが悔やまれるよ」

高らかに笑い声をあげながら、この国の王であるエドがやってきた。その側にはユキの父親のニコルさんもいた。

「エド、ニコルさん、来てくれたのか」

二人とも用事があるから昼の部の参加は厳しいと連絡を受けていたが、どうやら間に合ったようだ。しかし、二人揃って現れるのを見ると、なかなか珍しい組み合わせにも思える。

「こうして顔を合わせるのは久しぶりだね、ブライくん。改めて辻斬りや温泉街の件、礼を言わせてもらうよ」

ニコルさんは以前、辻斬りに襲われて酷い怪我を負っていたが、それも完治して元気な姿を取り戻した。

「当然、夜の部もあるのだろうか？　馬車に美味しい酒を積んできたから、是非とも味わってくれたまえ」

「気遣い感謝するよ。二人とも疲れただろうし、肉も残ってるから自由にくつろいでくれ」

「うむ、そうさせてもらおう。と言いたいところだが、その前に一つ頼みがある」

深刻そうな表情でエドが言った。よく見ると、彼の腕の中にはコートでくるまれた黒色の髪の少女の姿があった。

「エド、その子は……?」

「うむ。この村への道の途中で倒れていたのだ。無謀にも街から村まで徒歩で渡ろうとしていたようだ」

「それは無茶だ……」

ここエイレーン村とノーザンライトの街の間にはそれなりの距離がある。少なくとも子どもが徒歩で歩ける距離ではない。

「街に引き返すよりも村に来る方が近かったので、こちらを頼ることにした。随分と身体が冷えていて、凍傷も見られる。確か、ニコル殿を癒やした霊薬があったと記憶しているが、どうにかならないだろうか?」

「ああ、確かにストックはそれなりにある。効くかどうかはシエルに聞いてみないのだが」

さっきも言ったが以前、ニコルさんは辻斬りに遭った。

その傷は魔剣に仕込まれた魔素の影響で治療が困難であった。しかし、シエルの用意した霊薬がそれを解決したのだった。

ここよりもさらに北にある、魔族の住む暗黒大陸には、濃い魔力の渦巻くダンジョンがある。霊薬はその力を利用して生み出した物で、あらゆる傷や病気に効くらしく、どこにかなりそうではあるが……

「エスト、すまないが手伝ってくれないか? 薬を飲ませたあとは、暖かい部屋で休ませないと」

「任せて。空き部屋の準備をしてくるよ。暖かい毛布や《温風のかがり火》を用意するわ。それに、体力の付く食べ物もあった方がよいね。鶏肉や生姜があるから……うん、スープを作ろう」

エストは即座に自分がやるべきことをリストアップした。普段、お気楽な彼女も、こういう時は仕事が早い。本当に頼りになる子だ。

こうして、俺達は突然の来訪者の看病をすることとなった。

「……て。ねえ……んを……すけ……ブライ……」

エドの腕の中で、少女が苦しそうに呟いた。まだ息があつて良かったと安堵すると共に、早くどうにかしてやらないと思う。

「……って、待てよ?」

この子、最後に俺の名前を口にしたようだが……

彼女とは初対面のはずなのに、どうして俺の名前を知っているんだ……?

一体どういふことなのか気になる。しかし、今はそれどころではない。一刻も早く手当をしなくては。彼女の事情は追々、確認することしよう。

\*

さて、エドが遭難した少女を連れてきたその翌日、俺とエストは城の一室に眠る少女のもとを訪れていた。

「あ、あの、ありがとう……助けてくれて」

ベッドで眠っていた少女は身体を起こすと、礼を言った。

「礼なら君を見つけたエドに言っておやってくれ。きつとあいつが見つけてくれなかったら大変なことになってただろう」

「うん……あとでそうする」

ちなみに彼女がお礼を言うことになる相手は国王だったりするのだが、そのことを知ったら酷く驚くだろうな。

「色々聞きたいことがあるんだけど、まずは名前かな。私はエスト、このお兄さんはブライだよ。君のことはなんて呼べば良いかな？」

エストが優しく語りかけると、少女は恐る恐るといった感じで口を開いた。



「私の名前はシェリー。その、ノーザンライトにある孤児院に住んでいます」  
なるほど、孤児院というわけか。

「どうして、この村に来ようとしたんだ？」

「えっと、その……孤児院を助けてほしくて」

「助けてほしい……？」

それから、シェリーはこしばらくの間に起こった出来事を説明した。

彼女の住む孤児院は、最近院長を亡くし、その孤児院の出身者があとを継いだらしい。その人のことをシェリー達は親しみを込めて、姉さんと呼んでいたようだ。

「でも、姉さんは、急に倒れちゃったの。そしたら、怖い人がやってきて、一週間後に孤児院は廃業するって……だから、ブライさんならなんとかしてくれると思って……」

「どうして、そこでブライが……？」

エストが言うように俺もそこが気になる。

シェリーは昨日も、俺の名前を口にしてた。一体どうして？

「姉さんが、困った時はブライを頼って言ってたの。だから私、ブライさんがいるエイレン村に向かおうと……」

それであんな無茶な真似をしたってわけか。

「そのお姉さん……ブライの知り合いなのかな？」

「孤児院に知り合いなんていないはずだが……」

しかし、引っかけりを覚えるのも事実だ。そういえば昨日、どこかで孤児院の話をしていたが、あれは……

「確か、レモンさんの幼馴染が孤児院にいたって話だったな」

「ブライ、とりあえずその孤児院に行ってみない？ 子ども達の世話をしてる人が倒れちゃったんだよね？ その人も心配だし、残された子ども達も放っておくわけにはいかないういよ」

「……そうだな。話を聞いた以上、見捨てるわけにもいかなそうだしな」

子ども一人でわざわざ遠く離れた村まで来ようとするぐらいだ。相当、切羽詰まっているのだろう。どうして俺が指名されたのかはよく分からないが、身寄りのない子ども達だ。危険な状況なら保護を買って出た方が良さだろう。幸い、この村はかなり潤っている。子ども達の面倒を見るぐらいの余裕はある。

「シェリー。君達の事情はよく分からないが、もしも困っているなら、手を貸したいと思う。君のいた孤児院の名前を教えてもらってもいいかな？」

「う、うん。ありがとう。本当に助けてくれるなんて、とても嬉しい……」

緊張したような表情を浮かべていたシェリーが頬を緩ませた。きつと、孤児院のことが気がかりで仕方なかったのだろう。

「エルバース孤児院……それが私のいる孤児院の名前」

「エルバースだと……？」

俺はその名を聞いて驚く。その名前には聞き覚えがあった。

「ブライ、知ってるの？ 孤児院のこと」

「いや、孤児院のことは知らないが……その、知り合いの苗字と同じだなと思って」

「苗字……？ 私知ってる人？」

「まあ、知ってるっちゃ知ってる人だな」

そう、忘れもしないその人物とは――

そのあと、俺は愛馬のロイを走らせてエルバース孤児院へと向かった。

ノーザンライトの北東部、開発の遅れた庶民の街といった霧囲気の区画にひっそりと佇む、木造の家がエルバース孤児院だ。

そうしてそこで、子ども達と姉さん<sup>シスター</sup>を保護し、城へ連れてきたのだが、俺は今の目の前の状況が信じられないでいた。

「まさか、本当にここにいるなんて……」

孤児院の中で昏睡<sup>こんすい</sup>している人物を見て、俺は独りごちる。

なんの因果<sup>いんが</sup>だろうか。エルバース、忘れもしない名だ。

「まったく訳が分からない。どうして、お前がそこで眠っているんだ、セラ」

簡素なベッドの上の昏睡するセラを見て俺はそう呟いた。

セラ・エルバース――それは俺に初めてできた恋人の名前であった。

――なに、私が本気でアンタに惚<sup>ほ</sup>れてるとでも思ったの？ 全部演技よ。ほんととはアンタに触れられるなんて嫌<sup>いや</sup>でしょうがなかったんだから。

俺は以前、セラが吐き捨てた言葉を思い出していた。

「あんな風に言っておいて、いざという時は俺を頼るとか、都合のいい話だよな」

セラが俺と付き合っていたのは、同じギルドの仲間だったライトの気を惹くためだったはずだ。それにもかかわらず、困った時には俺を頼ろうとする彼女に、正直、思うところがないわけではない。

とはいえ、こんな風に昏睡する彼女の様子を見ると、恨み言を吐く気もなくなってしまう。

そのあと、不安そうに俺を見上げる子どもたちと、セラを保護し、城へと連れて行く。

「とりあえず、城に連れてきたがどうしたものか」

孤児院には幸い、食料は残っていたため彼らが飢える様子はなかったが、セラ以外に彼らの面倒を見れそうな大人の姿はなかった。

そのため、彼らをあそこに置き去りにするわけにはいかなかった。

「セラ……さん、全然起きないね」

眠りっぱなしのセラの側にはエストとシェリーがいた。

「セラ姉さん、もうずっとこうして眠りっぱなしなんです。ある日、急に倒れ込んだかと思ったらそれっきりで……教会で診てもらったけど原因が分からなくて」

よほど心配なのか、シェリーが目<sup>め</sup>に涙<sup>なみだ</sup>を湛<sup>たた</sup>え始める。

どういうわけか、かつて俺をこっぴどく弄<sup>もてあそ</sup>んだセラは、ノーザンライトの孤児院で子ども達の面倒を見ていた。

話を聞くに、前の院長が亡くなられた時期と【月夜の猫】がこの街に活動拠点<sup>きょてん</sup>を移した時期が重なり、孤児院の出身者であるセラがそのあとを継いだらしい。

「セラ姉さん、冒険者の仕事ですと仕送りしてくれてたの。この街に戻ってからは、孤児院の運営までこなしてくれて……多分<sup>たぶん</sup>、そのせいで……」

正直、別人の話<sup>はなし</sup>を聞<sup>き</sup>いてる気分だった。

さっきも言ったようにかつて俺はセラと交際<sup>こうさい</sup>していた。しかし、俺は彼女にこっぴどく振られた挙げ句、パーティまで追放された。率直<sup>そつちよく</sup>に言<sup>い</sup>って、そんな彼女が甲斐<sup>かい</sup>甲斐<sup>かい</sup>しく孤児院で働く姿など想像できない。

「とりあえず、アリシアさんに診てもらおう。どうしてこうなったのかは分かんが、ただの過勞<sup>かろう</sup>じゃないかもしれない」

アリシアさんは聖教騎士団に属するだけあって医術に通じている。教会での診察では原因は分からなかったが、アリシアさんならなにか分かるかもしれない。

俺の言葉にエストが応える。

「そうだね。嫌な人だったけど、放っておくわけにはいかないもん。それと子ども達の面倒も見てあげないとね」

それと、孤児院の方だが、どうやら先代の院長がノーザンライト魔導研究所に借金をしていたらしく、施設は彼らに接収<sup>せつしゆ</sup>されることが決まっていたらしい。そのため、行き場をなくす子ども達の受け入れ先が必要になる。

俺もエストも、子ども達を放っておく気にはなれなかったので、なんとか村で面倒を見られないかとセインさんに交渉<sup>こうしょう</sup>するつもりだ。

「よし、俺はアリシアさんとセインさんのところに行ってくる。子ども達と……その、セラは任せても良いか？」

一瞬、言葉を詰まらせたしまった。

以前、エストがセラに会った時、あまり良い印象を抱<sup>いだ</sup>いていなかった。そのため、彼女にセラのことを任せるのはなんとなく気が引けたのだ。

「うん。私に任せてよ!」

しかし、エストはそんなことなど気にする様子もなく、快諾<sup>かいだく</sup>してくれた。

正直、エストがそう言うてくれて助かった。俺はセラ達をエストに任せ、城をあとにした。

「セラさんが目を覚まさない……ですか？」

休暇中のアリシアさんは、先日のバーベキューのあともこの村に滞在していた。

俺はそんな彼女を頼って、村の広場を訪れていた。ちょうどエドと談笑していたアリシアさんに、事の経緯を説明する。

「どういうわけか、シェリーのいた孤児院の院長になってるらしくてな。そこで働いていたら突然倒れ込んで、以来目を覚まさないそうだ」

「ふむ。私がギルドを抜けてからの彼女の動向は知らなかったが、そのようなことになっているとは……」

エドが真剣な表情で言った。

「セ、セラさんが孤児院の院長……?」

一方のアリシアさんは、見たことないような不思議そうな表情を浮かべていた。

俺とギルドの間のトラブルについては、アリシアさんもよく知っている。それだけにあのセラが孤児院の院長になっているという事実がうまく呑み込めないようだ。

「と、とりあえず、昏睡状態というのは心配ですね。ひとまず、様子を見に行ってみま

しょう」

「ちょ、ちょっと待つでござる。今、セラと言わなかったでござるか?」

広場で話し込んでみると、レモンさんがやってきた。なんだか、驚いたような表情を浮かべている。

「話に出ていた孤児院の院長というのは、セラ・エルバースという者でござるか?」

「ああ。そうだが、もしかして……」

「そう。拙者の幼馴染でござるよ」

セラがレモンさんの幼馴染ということとは、彼の初恋相手ということだが……

「一体どういうことなんだ……!?!」

混乱して俺は大声をあげてしまった。

俺をこっぴどく振ったセラ、シェリーに慕われ、レモンさんの初恋の相手でもあるセラ。それらの人物像が俺の頭の中でまったく結びつかない!!

\*

「結論から言って、治療は難しそうです」

「なんだって……」

## 立ち読みサンプル はここまで